

ロナルド・サンプソン著

国家なき社会

この翻訳を半世紀以上にわたって
トルストイ的生活を送るかたわら
多くのトルストイの著述を日本語に翻訳される
北御門二郎氏に捧げる。

This Japanese translation is dedicated to
KITAMIKADO Jiro
who has put into Japanese many writings of Lef TOLSTOI,
living a Tolstoyan life for over half a century.

Ronald Sampson, Society without the State, London, 1985

横浜トルストイ同人

1988年

非売品

Yokohama, Japan, 1988

訳者序言

1. 本書はRonald Sampson, *Society without the State*, London (the Peace Pledge Union), 1985 ed.の全訳である。

著者は、氏のトルストイの英訳書の一つ「避けられない革命」によれば、ブリストル大学政治学講師で、トルストイの著書の英訳があり、その他の著書として「平等と権力」「権力の心理学」「トルストイ、平和の発見」などがある。

2. 段落の後にある注はどれも訳注である。(原文は相当に難解な英文であるので、翻訳にあたっては数人の友人にいろいろと助けていただいた。謝意を記しておきたい)。

3. 原書にはこの訳書では割愛した参考文献の指示があるが、それによると、政治権力について最高の研究はFriedrich Meinecke; *Machiavellism* で、アナキズムに関する文献はGeorge Woodcock; *Anarchism* に掲記されており、著者が個人的に示唆したい参考文献は以下とされている。

トルストイ「神の国は汝らのうちにあり」

トルストイ「さらばわれらは何をなすべきか」

Peter Brock; *The Political and Social Doctrines of Czech Brethren in the 15th and early 16th Centuries*, 1957.

Cordon Zahn; *Solitary Witness, the Life and Death of Franz Jagerstatter*, 1963.
新約聖書

4. この日本語訳は北御門二郎氏(1913 ~)に献呈される。氏は、東大を途中で放棄し、徴兵を拒否し、農業を営むかたわら、トルストイの三大長編小説「戦争と平和」「アンナカレーニナ」「復活」はもとより多数のトルストイの著作の日本語訳をされておられる。近く、氏の訳で「光りあるうちに光りの中を歩め」(地の塩書房)が刊行される。著書として「トルストイとの有縁」(武蔵野書房)「ある徴兵拒否者の歩み」(径書房)などがあり、前書に詳しい年譜がある。

5. 本書は横浜トルストイ同人の、P.エルツバッハー「レフ・トルストイ」に次ぐ2冊目の小冊子である。今後ともトルストイの社会思想、あるいは、「市民的不服従」に関連するものを刊行したい。次は、Mulford Sibley, *The Obligation to Disobey: Conscience and the Law* である。

序 文

今日でさえいぜんとして、ときおり、私は、ヒトラーは全く特別なもの、類のない悪弊であり、それ故にナチズムは実力によってのみ打倒できたのであると自分に言い聞かせて、1939年に決然たる態度を取って軍隊「勤務」(*)を拒絶できなかったことの弁明にしようとする。この特殊な自己欺瞞は私の世代にはほぼ一般的であって、今でも非暴力の立場をとろうとしない人々のつまづきの石(**)である。私たちは、ヒトラーは、ヨーロッパ諸列強の彼に先行する数世代の腐敗、暴力、欺瞞、軍国主義、戦争すべての最終生産物であり、実力によるナチズムへの抵抗はなおいっそう暴力的、抑圧的、機械化された危険な世界に帰着するにすぎないのであって、この世界こそまぎれもなくまさに1945年以来私たちが経験し、今でも経験し受難を被りつづけているものである、という基本的な事実を直視するのを忌避するために目を固く閉ざしていた。

* 原文はmilitary 'service'. 兵「役」と訳してもいいであろうが、引用符の都合で本文のように訳した。以下、原文の「...」は「～」で表す。

** 新約聖書「ローマの信徒への手紙」14:13 参照。

事実は、絶対的な、全面的に無責任な形態の権力はその本質からしてどんな形態の権力といささかも異なるものではない、ただその度合いが異なるにすぎない、ということである。もちろんその度合いは非常に大切であるが、その現象、悪弊の性格は同一である。最も恐ろしい圧制者とはそのようなものである。その理由は、a) 無数の個人が彼らに屈伏し、かくして自分の良心にのみ服従する自立的な人間ではなくなる。b) 誰もじっとたたずむことはできないし——私たちはすべて旅をしている——、権力への道を首尾よく旅し、権力を絶えず行使し、国内外の無数の競争相手から自身を保護するのに必要な残忍な手段をいつも油断なく講ずる人、このような人は必然的に腐敗の度合いが増大する。そして、これと反対のことも同様に真理であるが、惜しむらくは、それよりもはるかに稀少である。

レーガン大統領は、最初の大統領選挙運動のときに、——BBCはニュース番組でその一節を抜粋した——声高な、明快な、挑戦的な声で、アメリカは世界最大の国であり、アメリカをそのようにしておくのが自分の政策である、と宣言し、どだいアメリカのどこが間違っているのか、と修辞的に問うた。そしてアメリカの選挙民は、間違っているものは一つもない、と投票で答えた。誰が他方を制し、かくして世界を制するかに関する支配権をめぐる戦闘はアメリカとソ連の間のものであって、両方の戦闘者ともけっして自発的に他方に屈伏しないであろう。そうした状況は新しくはない。それどころか、それは人間の過去いつも存在していた。現在、唯一の相違は、この闘争のとのつまりの結末はもはや他方の側に対する一方の側の勝利ではなく、生き物の大虐殺であり世界の存続そのものへの威嚇であろう、ということである。そのような類をみない冒瀆行為は権力をもつ圧制者さえをも躊躇させるし、それ以外のものには息つくひまも与えはしない。

何がなされねばならないのか。真実を反復しつづけ、それに生きようとするところあるのみ。もし人が、正義を求めるにあたって、不正義は、世界で最も骨が折れ疲労する労働をする人々、つまり肉体労働者のうける報酬が最も少ないという事実に基礎をおくのであると指摘するとき、安逸をむさぼる階級がそれに耳を貸さないとしてもそんなに驚くに値しもない。しかし、もし平和主義、非暴力を求めるなら、なぜ人々はそれに耳を貸さないはずがあるか。結局、現代文化の少数者のみが、とにかく人類に対して物理的暴力を活発に行使している。彼らが耳を貸さないのは、自分たちが高く評価しているものを依存している社会の既存の全構造が不可欠な暴力に基盤をおいている、ということを知っているからである。それは不可欠な暴力に基盤をおいている。なぜなら、私たちは、誰もが他のすべてのものを追いつくために努力する社会に生きているから。たとえば、教育の領域において、幼い子供たちは「さいさきの良いスタート」を約束されている一方、教師たちは、政府が思い通りにするなら、買収されて自分たちの当座の同僚を追い落とすはずである。刑務所の管理について言うと、わが国は人々を、ほぼ5万人を監獄の中へ熱心に追いやろうとする点でヨーロッパの全近隣諸国を凌いでいる。そのような社会、多数の働かない剣士のような人々の試合から成る社会は、もしピラミッドの頂点にいる人々が自分たちより下にいる人々や国境を越えた競争相手として恐れる人々を十分に脅えさせる暴力を利用することができるなら、その結果として生ずる緊張、憎悪、威嚇しか内容とすることはできない。

人々はこうした状況に責任を負うことを否認するにしても、ある程度までこのことを認容している。もし人が全面的に擁護しかねる悪弊に抗議するなら、あらゆる色合いの保守主義者からの最もありふれた反論はおそらく、「しかし人生とは不公正である」であろう。しかしながら、不公正なのは人生ではなく、強者が弱者に不公正であることである。「貧しいものは自分よりも力強いものから自分自身を守る力強さを持ってはいない」。これは西暦前二千年紀のヘリオポリスの一司祭の言葉とされている。そして、誰一人として「貧しい人」の運命を喜んで受容しないし、とどまることなく繰り返される強者の地位の追求がハルマゲドン(*)の淵に私たちを連れて行き、そこではすでにして「宇宙戦争」について全く間の抜けた真剣さでお喋りされている、という事実を無視することもできない。

* 新約聖書「ヨハネの黙示録」16:16 参照。「汚れた魂どもは、ヘブライ語で、「ハルマゲドン」と呼ばれる所に、王たちを集めた」。

正直な人々、誠実な人々にとって、人間の状態に関する真実は間違えようもない。「善をもって悪弊を打ち負かし、人間の尊厳を保持する戦いにおいて、実力を使用することは間違っている。実力を使用することによって勝利しようとするものは、心や精神によって勝利できなかったものである」。この議論の余地ない言葉は、1984年10月19日、ポーランドの殉教者、ポピエルスコ神父によって、残忍に虐殺される前の最後の説教において気高く語られた。「善は常に死刑台の上であり、悪は永遠に王冠の上にある」のはなぜか、私

たちはジェームズ・ラッセル・ローウェルとともに、なぜそうなのか、問いかけねばならない。

それは、一口に言えば、世界を見渡すと、最も強力なものが必ず勝利するからである。しかし、最も遠くへ伝わる声は、争いもなく善であり真実であるものの大義、実力の汚点とけって絡みあうはずがない大義を心に抱く人の静かな声である。この声は、しばしばむごたらしく沈黙させられるけれども、傾聴されつづけるし、全歴史がまさしく証明しているように、時を経て優勢となる。

(20頁から続く)

争ではなく平和に貢献する方法で生活することも必要である。戦争へ連なる生活様式とは、権力の首座と他人に対する威厳を確保するために富の獲得競争に基づく生活様式である。個人が人間性、平等、他人の愛情の獲得を確実なものとするのできるどんなものも真の進歩であり、人類の平和を促進する。生活の機械化、増大する速度、富、権力のためにこうしたものを犠牲にするどんなものも逆行的で、当然ながら破壊と苦悩に帰着する。人々は相互に争うのを止めることを学ばなければならない。それは困難であるが、けって不可能ではない。

競争からの解放と相互愛によるその代替は家庭のなかでのみ始めることができる。そして、そのような家庭は相互に愛する男女によってのみ樹立することができ、そのことは生涯にわたる互恵的な基盤でお互いの個性を尊重することを意味する。それ以上に子供の欲求に奉仕するものはないし、彼らは、結局、生んでくれるように頼まなかったし、この保証をしてもらう権利がある。その代わりとなっているのが、可能であるなら、現代よりもずっと狂気じみたロケット推進式の文明に奉仕するもっと自動化され機械化された戦士の生産である。

その選択が人間性のためにこれほどあざやかに浮かびあがったことはこれまで一度もなかった。私たち、人間の区別なく私たち全員が選択せねばならない。その成り行きは私たち誰もがなす努力にことごとくかかっている。私たちは平和を持たねばならない。私たちは平和を必ず手中にする。しかし、本当に途方もない闘争が私たちの眼前に横たわっている。

国家なき社会

アナキーに関する伝統的な見解は非常に単純である。アナキーとは政府の欠如を意味し、政府は法と秩序を維持するのに必要であって、法と秩序がなければ生活は万人にとって地獄である。だから、政府は善でアナキーは悪である。上品な人々はすべてそのような単純かつ自明な命題を理解できる。だから、現実にはアナキーを唱道する人々は、邪悪であるか精神的に均衡がとれていないか、のどちらかであるにちがいない。アナキーを唱道する少数者のなかに、精神的に均衡がとれていないものもまぎれもなくいるという事実がこの伝統的な見解をいっそう確証しているように思われる。

にもかかわらず、この伝統的な、一見したところもっともらしい見解は正しくない。アナキズムと平和主義の間の関係は非常に緊密であって、私はまず平和主義からはじめることにしたい。

平和主義者とは何か。辞書は平和主義者を戦争の廃止を求める反軍国主義者と定義する。この定義は、「正義の戦争」を擁護しようとする人々とあらゆる戦争を拒絶する人々との間の由々しい相違を明快にしないという点で、とうてい満足できるものではない。私の使用する「平和主義者」という用語に含まれるのは、どのような代償を払おうとも、人間の生命を意図的には奪おうとしない原則に従って生きる人々のみである。(考えられるどのような状況においても自分たちが何をするか確言できる人々は、いるにしても、ほとんどいない。しかし、もし選択しなければならぬならば、平和主義者は殺すよりはむしろ死ぬ方を切望する)。もし例外をつくりだすと、平和主義の要点全体が消失する。戦争へ赴く人々は、自分は心の奥底において平和主義者であるが、仇敵の邪意によって平和主義を放棄せざるをえなかったのだ、とまず苦もなく得心してしまう。

平和主義に対するありふれた反対は、自分の生命を罪ある人々に委ねるよう罪もない人々に求めることは非理性的である、ということである。平和主義者の立場は極端なもので見られている。しかし、その立場の強さは、それが、人間の生命を奪うことは邪悪であると固く確信することに基盤をおく事実由来する。もしある人が人間の血を流すことを憎悪と恐怖をもって忌避しないならば、その人は、自分自身の生命が脅かされるとき、暴力を最もさしひかえなさそうである。軍隊に加わることは拒絶するが、死刑やヒトラーのごとき輩の暗殺を支持しようとする「平和主義者」はその問題を全く考えぬいたことがない。もし人が、殺されるべき悪人もいる、と冷静に考えるなら、その人の生命を直接的に脅かす悪人の言い分を聞いてやれそうにない。

平和主義は死に対するある明確な姿勢を必然的に含意し、かくして形而上学的あるいは宗教的考察とは切り離せない。もし人間の生命が不可侵であるなら、動物はなぜ合法的な虐殺の標的であるのか。多くの真正の平和主義者は肉食主義者ではないが、その立場の論理の基盤は不安定である。全く思いやりある理由で安楽死を擁護する平和主義者もいる。

そのような立場の弱点はまさに、それが人間の生命の尊厳という原則が主張する生命の保護を脅かす、ということである。

もしこのエッセイがもっぱらアナキストに向けられていたなら、私は、上述の形而上学的立場がアナキズムに論理的に固有のものである、と明らかにすることに取っかかったであろう。私がここで明らかにしたいのは、権力問題に関するアナキストの懸念が人間の生命の尊厳に関する平和主義者の確言に論理的に固有のものである、ということである。ここで、全面的に一時停止することがおそらく賢明であろう。誰でも「アナキズム」とか「平和主義」とか、あるいは、ついでにいうと他のどんな「主義」をも性急に定義しようとするやいなや、ある特定の定義のなかにその人自身の信念を取り違えたり、変装したりするものを見る同類の「信奉者」からの否認を直ちに予期できよう。私は、自分自身のためにのみ語るつもりだ、とはほとんど言う必要もない。

だから、「平和主義者」とはどんな状況においても人間の血を流すことに加担することを拒絶する人々である。ある特徴的なスローガンが平和主義者の確信を要約する。「人々が戦うのを拒絶するとき戦争は停止する」。——しかし、人々が戦うのを拒絶するときのみ。従って、平和主義者は戦わないという莊嚴な意図を前もって宣言し、非平和主義者に自分たちに合流するように呼びかける。その論理は非の打ちどころがない。だが、それでもやはり戦争はつづくし、そのうえ悪化する。

それで、平和主義者は、なぜこの理性にかなった救済策が望ましい結果を産まないのか、を問わねばならない。「私たちに合流されたい」、と平和主義者は言うが、その訴えは功を奏さない。彼らは私たちに合流しないし、合流しようとしぬ。なぜか。それは奇妙ではないか。本当のところ、誰一人として戦争を望まない。それでは、なぜ人々は平和主義者の自明の万能薬をそんなにかたくなに拒絶したがるのか。平和主義者は理解できない挫折、苦悶、ときには絶望にさいなまれる。それをどうやって説明できるのか。

戦争はだしぬけに起こるのではない——けっしてそうではない。ただ戦争はあまりにも多くの事前準備を必要とするからといってそうなるのではない。戦争には常に武装準備の状態が先行する。なぜか。最も緊急な課題の一つは、兵器省が「防衛」にかこつけてもはや仮装できなくするよう少なくとも十分に世論を啓発することである。

常時使えるような状態の武装暴力の貯蔵庫(どんな国家も費用を負担できそうである大規模かつ破壊的)が必要である。なぜなら、それがなければ、ある政府は他の政府の武器庫を(今までのところは)支配できず、他の政府に向かいあうと不利であろうから。どんな点で不利なのか。富、民衆、天然資源に対する支配、すなわち、権力に関して、である。政府自身は邪心なく安定のみを求めているふりをするが、この公言の誤りは、安定は兵士各自の水準で維持できようという事実によって立証されるし、この種の安定はけっして今は存在しない。さらに、追い求めていると公言される安定なるものはいつでも戦争で露呈してきたし、いつでもそうするにちがいない。けれど、現実には権力、つまり支配をめぐる

相互に殺しあう闘争であるから。

この非常に簡潔な分析それ自体で、このエッセイの始めとしたアナーキーの性格に関する、政府によって注意深く育まれた伝統的な見解の誤謬を立証するのに充分である。この見解が前提とするのはこうである。すなわち、もともと人間は、自然の秩序のない状態で、つまり、生活が「孤立し、貧しく、不快で、残酷で、乏しい」「万人の万人に対する戦争」において走りまわり、法と秩序が全面的に欠落しているがまんできない帰結に絶望的に耐えていたのであるが、ついに、あるすばらしい、無私の、公共精神ある人々が前面へ進み出て、公職の重荷を担うために自分自身の私的な利害を気高くも犠牲に供した。このようにして決断と執行の責任を背負うことで、彼らは政府というあの巨大なレビヤタン(*)を出現させ、安全で秩序ある生活の恩恵と最低状態の社会福祉はそれのみに負っているのである。

* 旧約聖書「ヨブ記」のなかの怪獣。「お前はレビヤタンを鉤にかけて引き上げ、その舌を縄で捕らえて、屈伏させることができるか」(40:25)。

これは純粹の神話であり、純粹のホップスの形態であろうと、はたまたロック的、ルソー的、パーク的、ベンサム的異種のいずれであろうと、どんな変形版においても、辛抱強い数世代の研究者に示されている。その理論は間違っている。なぜなら、政治的正当性の理論に関するあらゆる異種は、政府は天与の、もしくは生物学的な状況における人類の幸福の必要物にではなく、仲間に対する権力を獲得し、強化し、できることなら、拡張しようとする個人のすべてを消尽するどん欲な決意に起因するという一つの決定的な事実を暗黙のうちに無視することに意見が一致する、からである。

二つの単純な理由で、この状態を何物もけっして正当化することはできない。第一に、止まることなく再発する戦争の形で、全体としての人間性に関するこの理論から派生する恐ろしい帰結。第二に、人々は実際には人間としての全要件が平等であり、すべての人々が同様に神の被造物で、自分と同様な他の人々ではなく神のみに共同して服するというのに、他人の権力と支配に服さねばならない人々もいるというのは神の意志を冒瀆するものであるから。

この素朴な論点が真実であることは、綿密に精査するととても明らか、とても自明であり、それぞれの全領域において支配者の主張にとって絶対的に致命的であるので、それを単に擁護すること自体が、私たちの文化や制度が基盤をおいているとされる自由主義的な言論の自由、論議の自由、出版の自由に対するすべての主張の偽善を暴露するに充分である。

誰でも、この見解をできるだけ二義性なく明白に述べることによって独力でこれを検証することが自由にできる。そうすれば、彼らから完全に遮断されている現代の大衆「民主主義」を形成する多くの公衆と意志疎通するどんな回路をもすぐに発見できるであろう。このことは、どんな公的の検閲省もなく、市民権のどんな公式の削減もなく、権力のどん

な想定上の「陰謀」論をも仮定しないで、達成される。そのことは、この理論がすべての労働組合、力ある労働組合に最も遍在するものに破壊的、直接的に向けられているという事実によって、自然発生的に生ずる。

すべての役人、すべての権力執行者、位階制的梯子をのぼりたがっているすべての人々、人生のどの段階においてもすべての支配的な、あるいは支配的なつむりの人物は、思想を意識的に公言すらしなくとも、人生の意味総体に対する根本的な威嚇を認識する。彼らはそれを本能的に認識する。彼らは即座に体を強張らせ、悪意ある言葉に対して耳を固く閉ざし、そのような緊急事態において残された唯一の効果的な武器、つまりボイコットや沈黙の威嚇という武器に直観的に頼る。彼らは黙殺する。

しかし、厄介なことに、黙殺は恐ろしい異説を沈黙させはしない。それは沈黙のなかで反響しつづけ、ついに沈黙それ自身が、政治家の事務所や執務所、言論界、大学、法曹学院、重役室、教会で不気味に残響し始め、ますますかまびすくなる。けだし、ひとたび秘密が漏れるや、ひとたび二才の子供が結局皇帝は何も着ていないと大声であえて叫び始めるや、被害が発生するからである。だまされやすい、踏みにじられた人々さえもが、華々しさや虚飾、任官式や軍旗敬礼、法冠と王冠と金びか、弱者が強者に従属し、貧者が富者に略奪されるすべてのとんでもない乱痴気にもはやだまされなくなるのは、時間の問題でしかない。

自明であると考えられるであろうことは、たとえすべての人々が善であるにしても混乱はやはり生じ、優先事項や相互の申し合わせの内容に関してやはり討論する必要があるだろうが、政府、つまり強制については必要ないであろう、ということである。だから、同様に、明らかであると思われるのは、他の人々が何を選んでしようとも、アナキスト自身はいずれにしても政府は必要でないという方法で行動すべきである、ということである。「そして、全世界が真のキリスト教徒、すなわち本当の信者からできあがっているなら」、とマルティン・ルターは述べた、「王子、国王、貴族、剣、法律は要らないであろう」。これ以上に明らかなものがあるか。しかし、もちろん、ルターは、だから「王子、国王、貴族、剣、法律」は悪弊の産物であり、道義的に擁護しがたいし、誤っているにちがいないという明確な結論を進んで抽出しようとはしない。彼は、反対の結論、つまり、たいがいの人々は善ではないから、政府は必要でありそれに従わなければならない、という結論を引き出す。

「しかし、教区役員、死刑執行人、法律家、弁護士、およびその同類もキリスト教徒であり、救済される地位にあることができるのかどうか、さらに問われる。答えはこうである。上で証明されたように、もし国家とその剣が神の制度であるなら、剣をふるうために国家が必要とするものもまた神の制度であるにちがいない。邪悪な人々を逮捕し、告発し、虐殺し、破滅させ、善人を保護し、無実にし、擁護し、救済する人々がいなければならない」。

善い人もいるし、悪い人もいる。しかし、悪い人々が非難されるかわりに、善い人々は、彼らは少数者であり、それゆえに彼ら自身の基準を放棄し、多数者の基準を採用せねばならない、と言われる。そして、このことが事実上すべての人々が過去にしており、現在していることである。彼らはなうての詭弁やかさまな推論を真理として受容する。事実、政府が悪から生ずるとするなら、そのとき、どんな犠牲を払おうとも、善い人々は毅然たる態度をとり、何物ものにも加担しないことがいかにずっと必要であるか、さもないと世界は善い人々の基準や実例さえも奪われてしまうであろう、ことは明らかである。

もし、政府が正当化され、かくしてすべての政府がそれなくしては統治できないであろう最低限の制裁として指令しなければならないような暴力の道義的な正当性をすべての人々が認めねばならないのなら、そのとき、権力への意思という邪悪な性質を厳しく自覚することがもっともらしくとりつくりわれ、見失われる。政府そのものは、民衆の免れない必要物——外国の侵略や犯罪から民衆を擁護する安全策という福祉業務——の一つの対応物と考えられている。だから、政府は公務という慈悲深い装いをとって姿を現し、手先のごまかしがとても巧妙なので、民衆は真の悪党、それ自身侵害と犯罪の主要な源泉である権力への意思に全く気づかない。さらに、この分析は現実の人間の歴史に即応する。国家は社会契約、重要な公務の要求から発生したのではなく、角逐する首領、略奪貴族、そのそれぞれの分派や下臣どもとの間の権力をめぐる闘争から発生したのである。

懐疑論者はこれだけはしぶしぶ認容するかもしれないが、民衆は政府がなければどうしても生きてはいけないという確信は揺らぎそうにない。もちろん、ある人々は他の人々を支配するのにとても情熱的に熱中しているのであるから、どんな権力をもってしても彼らにそれから引き出す快楽を見合わせはしないということ、他の多数の人々は喜んで支配に黙従するほど個人的な責任と尊敬の感覚を喪失している、ということが意味されるならば、その趣意は明らかである。しかし、このことが、政府が必要であり不可避であると人々が大いに頑固に言われるときに意図されることではけっしてない。意図されることは、彼らは自分自身のために指導者を持たなければならない、さもないと「アナキー」がつづくであろう、ということである。この確信は、政治的な右派と全く同じくらい政治的な左派にも根強い。指導者の地位への渴望、自分のために権力を入手したい切望は右派にも左派にも共通しているから、それらを求める闘争はそれぞれの党派（すなわち権力組織）においてそれらの存在の意義総体を形成するのである。

事実、権力崇拜は、ほとんどすべての人々に今なお深く染み込み、無自覚的であり、無意識的であるので、権力そのものが病弊なのであるから「権力」手段によって不平を癒そうとすべきでない組織力の犠牲者に示唆するだけでは、闘争を放棄し、信念を裏切り、弾圧者に譲歩し屈伏するよう懇請されているという怒りをこめた疑念を不可避的に喚起する。

しかし、これはけっして真実ではない。結局、この論理は他の場合にはあてはまらない。

大部分の人々は軽信、脆弱、偽善、不実であるから、それだから誰もが軽信、脆弱、偽善、不実であるはずであるという論議、そうしないということはユートピア的であるか裏切りに等しいであろうという論議のことは、どのように考えられるのか。しかしながら、係争点が権力への意思となるやいなや、論理は放棄され、民衆は彼らを今日の彼らにした弾圧者の悪徳そのものを模倣するにちがいない、と力説される。この点において、古くからの論議が持ち出されそうである。いわく、「だが、あなたは権力はすべて悪であると推定している。私たちは悪弊から自分自身を保護するためにのみ、すなわち、十分な根拠があって権力を望むのである」。

権力は、定義によって、民衆が自分から進んでしたがることを彼らにできるように強制できる能力を意味し、正当と認められないのはまさにこれである。すべての憤慨、反対刺激剤、報復欲、要するに、悪弊が誘発されるのは実力、強制のこの要素からである。現在の抑圧者や弾圧者を今日の彼らとしたのは過去の権力、権力の無数の行為の遺産である。そして、権力が増強されると現状の悪しき要因が増大するだけである。権力とその悪しき帰結に対する唯一の応答は、もっと多くの権力にすぎない対抗権力ではなくて、権力の対極物である反権力、すなわち、勇氣ある不屈の無権力性、つまり愛である。

すべての権力を奪われ、組織もなく、労働組合もなく、政党もなく、警察力もなく、軍隊もなく、途方もない悪弊の大海のただなかで孤立した「権力もない」個人は何をなすべきなのか。処方するのは容易であるが、実行するのは非常に難しい。にもかかわらず、可能である。そのうえ、効果的であり、真の自由への道を一步一步前進するのがたった一つの解放の手段である。

個人は、自分を圧迫し、支配し、対等以下としてしか処遇しない連中に、考えられるかぎりの唯一の時間と場所において、つまり、そうなる時と所で、立ち向かい、連中の毒牙を引きぬかなければならない。それはけっして容易ではないし、何度も民衆はたじろぎ、失敗するが、試みつけなければならぬ。支配はいつでも個人間の関係の形態をとる。かわりある特定の関係の場でそれと対決し、それを無効にしなければならない。しかしながら、たんなる個人は無力であると繰り返し繰り返し反論がなされる。たった一人で何ができるか、が問われる。その意味するところは、たった一人ではない誰かがそばにいるということであるように思われる。しかし、悪弊が大手を振って歩くとき、民衆は手をこまねいて、「たった一人」として自分の無力を嘆息し、間違ったことを押し進め、それをもっとも効果的になすのである。

事実、自分の信念と対応をある程度まで支配する組織に結びついている「たった一人」は実際のところ、すばらしい目標があるので、たいがい傷ついている。そのような人が権力者の夢である。支配の位階制を通して、民衆を麻痺した自動人形にしてしまうことができる。たとえば、徴兵制度は恣意的な権力が自由な民衆を全面的に屈伏させるにあたって惜しまずに行ってきたものをこの上なく具現してきた。近代技術は新しい展望を切り開き

初めている。人間を量的な数字、新しいテクノクラートによって支配される機械へ送りこまれるコンピューターの資料に還元する権力は、人間のロボット化の新しい可能性の脅威をもたらしている、ことは疑いない。

他方、「権威」によって支配できず、外から押しつけられる規律ではなく、自分自身の良心の規律に應える人は、「権威」あるすべての人々がすばやく認識するように、他人を支配する人々にとっては非常に潜在的な威嚇である。良い思想も悪い思想も急速に広がるだけではない。人間である模範の効果は高度に感化的である。権力を求めず、権力に訴えず、個人的な利益を求めず、正義のために一切を求める孤高の異端者の勇氣ある模範の長期にわたる効果をいくら強調してもし過ぎない。彼らの価値は実に宝物にはるかに勝っている。

だから、政府は必要であると断言されるとき、このことは、現在の心理状態に基づく現在の人間関係を述べたものとしてののみ有効である。しかしながら、この心理は、人類の心理- 生物的構造に固有なものではなく、幼児時代の従属性から完全に解放することができないことによってもたらされたものである。自由になること、平等を達成することはけっして容易ではない。それどころか、私たちは一人一人の情緒的生活のなかで深い抵抗に遭遇する心がまえを作っておかなければならない。しかし、それでも、達成することは可能である。

多くの人々は両親の支配の主要な糸を断ち切らないうちに死に、子供のころ服従していた無言の命令に服従していることに、そうしていると気づくことなく、最後まで従うという事実は、そのような無意識の隷従が万人の運命である、ということの意味しない。覚醒することは困難かもしれないが、けっして不可能ではない。さらに、どの成功手段も少なくとも一人の他人との人格的な関係を自動的に変革するのみならず、与えられ目にされる模範によって他人に影響を与える。

誰でも諸関係の大きな相互にからみあった網の中心で必ず生活する。どの一つの点においても関係が質的に変化すると多くのさまざまな方面で徐々に反応が発生するであろう。最も基本的な関係は家族、家庭内であるが、社会関係と雇用関係は家族的きずなから生じ、相互に反応しあう。

私自身は、平等を基盤にした家族関係——父- 娘、母- 息子、夫- 妻——を再び方向づけるにあたって思いどおりにふるまったことがあまりないものが同一の原則に従って社会ないしは雇用関係を再び方向づけようとすることができるかどうか、極度に懐疑的である。もし、現代文化においてはほぼ不可避免的にしなければならないように、位階制的な指令の鎖のなかである地位を占めるなら、自分に向けられる「権威」に抵抗する勇氣を発見するであろう。しかし、もし両親の精神的な支配からの解放を達成しないなら、「上位者」の支配に抗する成功した抵抗は成功した自我の主張あるいは権力に対する欲望の増大をきつともなうはずである。

外的な支配からの自由を達成し、良心の自律的な内的な拘束、すなわち、よき「アナキー」へ服従するようになるために、権力へ抵抗することが必要であるのみならず、自身自身の権力欲を克服し、自分自身は、自身ほど強力ではない他人に対して、自分自身よりも強力なものの中にある嫌悪すべき役目を果たしてはいない、と確信することも必要である。

真の力強さは、自己主張的ではなく、かといって同じように他人の支配意志へ順応性があるわけではない大胆不敵な無権力性にある。事実、自己変革という決定的な要因がなければ、おそらく支配への抵抗は、支配をめぐる争う二派の今ひとつの例となるであろう。私の闘争はこのとき正しいかもしれないが、頂点に立つやいなや、頂点にいる他の人々のやり方で必ずや振る舞わないであろうか。

この意識的な自覚、この程度の自己変革、「アナキー」と平等へのこの意思があるとすれば、個人は大いに有益な性格の建設的な社会的変革をもたらす特異な位置にいる。位階制において自分より下にいる人々に対して、彼らは、穏やかに謙譲に振る舞い、「上位者」に従うことが正常な義務であると信ずるように誤って教えられてきた他人に、自分の意思を押しつけるために地位を利用することを絶対に差し控えようといつでも努力するであろう。自分より上のものに対して、彼らは丁重であるが、断固としており、すなわち、権力への意思は、自分の生得的な権利ではないが、現実の不適當かつ未成熟の感情ということで唾棄される、といつでも「上位者」に感じさせる。

どの状況も独自であって、人間関係についていえば、どう展開するか詳細にはけっして予見できない状況における行為に関する規則を制定することはできない。しかし、権力へのボスの意思を快適に反撃する方法はしばしば発見できる。人間関係におけるこの「権力」要素は決定的に重要である。誰でもいつもそのことに気づいているが、それはとても歪曲され、煩わしいと感じられるときでさえ、本来的で疑問の余地ないととても広くうけとめられているので、それに気づいていると自分で気づいていないでも、人々はそれに気づいている。すなわち、権力、服従、指令の規則はそれと気づかないでいろいろのやりかたで君臨する。

しかしながら、彼らが無意識的水準で現に気づいているという事実は、誰かが役割に基づいて行動し、地位の期待するものを無視し背反すると、すぐさま明らかとなる。「ボス」が退場することだけが必要なものであり、そうすると「権力」が存在することによって引き起こされるわずかな緊張が直ちに消失し、人々は安堵する。権力への意思をほとんど持たないか、全く持たない人々は心底いやいやながら「権威」の位階制的位置を受容する、ということもときおりある。その位置を受容するだけで、彼らが、かつては同僚であったが今では臣下である人々といっしょに以前は享有していた関係の性格に、たとえわずかであっても意義深く、ただちに、かつ不可避的に影響を与える。

この状況はかなり稀な例外である。通常、権力をめぐる競争における勝者は、どんな競

争相手よりも脇目もふらずに、情熱的に、首尾一貫してそれを望む人である。すべての役人や役人になりたがろうとする人々によって当然のことと受容されている物事を処理するこの方式の根本的理由は「誰かが決断しなければならない」ということである。

このことは真理ではないのだから、縮減するように求められるが、必要な治療をごくまれにしか受け入れない非現実、尊大さ、傲慢の微々たる趣は、いかに微かであろうとも、すべての役人や意思決定者に必ず付着する。事実、集団的意思決定がなされることになるや、その過程の効率性は「権力」者がただ消滅したことのみによって途方もなく高められる。「政府」は、ことのほか必要ではないのだが、個人の判断し、確信し、発言する全能力の集団的發展にとって唯一最大の障害である。

しかし、権力者自身にこれを理解するのを期待することは全く望みがない。彼らが感得できることは、委員会、会議、集会を如才なく思いのままに操縦してなされる決定に滑らかに到達することと、彼ら自身の支配的な意志が引っ込められるときに生ずる不揃いの、規律の行き届いていない、緩慢な、厄介な、混乱した手続との間の対照だけである。決定的であるのは、困難事の真因に関する見解や観念に寄与することができる個人の全能力を展開することである、ということが彼らには理解できない。脅かされ、抑制され、発言が無力であればあるほど、ますます重要になるのは、その服従が権力者のエゴが思い通りになる手段である同胞を解放するために忍耐しなければならない、ということである。

もし、短期的に単なる行政的効率の観点から犠牲が払われなければならないとするなら、その犠牲とは支払われなければならない犠牲である。私は「単なる」という言葉を使用するが、それは、行政的効率を軽蔑するからではなくて、それを常に人間諸関係それ自身に従属させておかねばならないからである。そして、これが遵守されるとき、それは究極的には行政的効率そのものの価値を高める。短期的な行政的効率は、まさにそれが権威主義、憤り、恣意的な権力、ストライキ、反抗などを産み出すときに、高くつく。いかに錯綜していようとも、いかに客観的にときとして誤りであろうとも、真に民主的な意思決定は権力への意思によって生み出される社会的な不統一や過酷さをけっして生み出しはしない。

もちろん、この新奇で全く予期されない処遇に屈する「ボス」がそれを快諾するとは期待できない。それは最終的に彼らにとって良いのであるし、実際、まさしく彼らが必要とするものなのであるが、この診断と治療に基づく勧告とに対する感謝の表明はほとんど予期できない。「ボス」はきわめて自信をもって反応し、まず間違いなく扱いにくくならうし、事実、危険となるかもしれない。ボスは武器を持ち、その利用方法を知っている。結局、これは、彼らが自尊心の本質と考えるように誤って教えこまれたもの、すなわち、これまでの自分の生活の意義すべてを構成してきた他人に対する権力と直接的に衝突する。明らかに、彼らは争闘なしに屈伏しまい。それだから勇気が不可欠であり、肝要なのである。ボスの権力に挑戦する一方において、挑戦する人々自身がけっしてそれを切望しない

ということがいつでも示されるべきである。まるでその反対なのだ。

粗野や虚勢に堅り立てられないことも必要である。すべての「ボス」（すなわち、すべての権力愛好者）は究極的には脆弱で、彼らが圧迫する人々によってさえ愛されたがる。彼らは尊敬の低下、卑屈な人々からの尊敬の減少にすら傷つきやすい。だから、「ボス」が苦い教訓を学び、自分「の下の」他人の自立や自尊心を尊重する兆しをほんのわずかでも表へ表すとき、眼の肥えた理解を示すことが重要である。しかし、主導権は組織における肉体的に弱い仲間から生じなければならない。その人がするように学ばなければならないことは、「ボス」に従うことではなく、いわんや彼らを殺害したり、亡命させたりする（旧式の革命において頻りに試みられたように）ことでもなく、平等、アナーキー、正義へ向けて平和的に彼らを再教育することである。私たちは機転のきく、丁寧な反抗の技巧を習得せねばならない。

ここで示唆されるような綱領は評判をかちえ、急速な応答を喚起しそうである、と考えられるかもしれない。結局のところ、何がそれ以上に「権威」のくびきに苦しむ私たちの大部分の心のなかの抑圧された反抗者に訴えると思われようか。雇用者に対して被雇用者に、ボスに対して労働者に、支配者に対して被支配者に、資本家に対してプロレタリアートに蜂起するよう訴えかける以上に自然なことが何かあろうか。実践的に、それ以上に困難なことはない。その理由を被抑圧者の恐怖、つまり、支配する人々が強力な制裁手段を持っているという認識のなかにも、部分的に求めることができる。

その理由は、被支配者は、伝統的な意味の「アナーキー」とみなすように深く仕向けられてきた平等を恐れる、ということである。彼らは支配者自身とおなじぐらいそれを恐れる。この理由は、一つには、私が上で示唆したように、心理的である。民衆は、ごく幼いうちから、両親の支配という主要なしがらみのなかで育てられ、母親と父親の支配へ服従するきずなを断ち切る青年時代の課題を比較的成功裡に達成できるのはごくまれである。事実、もし両親自身が完璧な精神的かつ情緒的な平等にもとづく相互関係を享受したことがないならば、深い分析なくして解放というこの青年期の課題を満足に達成することはできない。そのような状態は現在の文化のなかではまずけって発見できない。

子供たちは性的な対立によって生み出される緊張によって引きさかれる家庭内では子供時代に適切に愛されていないので、他人を支配しようとする意思のなかに生涯の意味を見出しながら成長する。人々は平等を恐れるが、それは、彼らの生涯をかけた苦闘の目的であるもの、すなわち、情緒的貧困を埋め合わせるであろう特権と支配に由来する重要なのであるという意識を除去しかねない条件をそのなかに見出すからである。最も圧迫されたものが「アナーキー」の暗示するものに恐怖をもって反応するであろう基本的な理由がそれである。政府がなければ私たちは何をするのか、と彼らは問う。

別の同様に論理的な次の疑問はけって問われぬ。「突如として全被支配者がこれ以上支配されるのを拒否すると、何が起こるだろうか」。支配者はすべてたぶん神経衰弱に

陥るであろう。しかし、その疑問自体は、誰にも容易に分かっているように、馬鹿げている。とはいっても、彼らは、「政府がなければ何が起こるだろうか」という疑問が同様に馬鹿げているということをそんなにたやすくわかっていないのであるけれども。これらの疑問は、現在の制度がぬきさしならない形態の人間諸関係を反映しているから、馬鹿げている。掘り崩し、修正せねばならないのはこの現在の形態であり、これは徐々にしかなされない。急速な破局的変革という意味の「革命」について語る人々はその課題を掌握できていない。

他方、伝統的な権力の座にいる人々が自分よりも「下に」いる人々の態度がもはや忍従的でないと把握しそこなうと、早晚、支配者によって制定された法律の境界外で緊張した激突がきつと起こる、ということは間違いなく事実である。そのような状況が生起するときには、「下位」の人々がこの上ない自己規律、自制、非暴力をひれきすることが肝要である。自分の権力が掘り崩されつつある人々は結局、衝撃的な経験をしているのであり、暴力的な反応が彼らに可能であることを十分に顧慮しなければならない。牙は引きぬかなければならないが、これに暴力がともなうとき、それを引き抜こうと試みる人々はある程度失敗してきたし、付随する犠牲を確実に支払わねばならないであろう。しかし、こうした漸進的な変革は、思慮深い、鋭敏な、勇敢な個人が家庭、職場、社会的結びつき総体のなかで自分自身の人間関係の性格を変革する困難な課題に着手することによって作動することができるだけである。

どんな自己欺騙もなくして直面せざるをえないものは、不平等に対する信念が、それとは逆の敬虔な異議申し立てにもかかわらず、まさに現代イギリスに非常に深く根づいている、ということである。特権を享有している人々は自分たちの生活様式とその意義に対する脅威を平等のなかに見てとる。平等という条件の下では、誰が汚れた仕事をするのだろうか、誰が雑用をするのか、彼らは必要に迫られて、またうっかりした拍子にもの哀しげにときとして問いかける。自分の公正な分担を果たすと期待されていると考えるだけで、恐怖と同じくらい不信の感情を誘い出すのに充分である。

第二に、別の疑問が隠蔽されている。もし彼らが特権、地位、名誉ある位置を確保するのに生涯をかけた精力をふりあてたくないのならば、彼らはどのような意志に自分たちの精力をふりあてるのか。

服従と搾取からの救済としての平等を歓迎すると先験的に予期されているであろう非特権者も平等に対する信念を大概実際には拒絶する。その理由の一つには、現実がいまだに存在せず、それ故に「理想」といういかがわしい範疇に入れられねばならないものに対する不信のために、一つには、自分よりも優れている人々であると考えるように教えこまれている人々を不快にさせるのではないかという恐れのために、そして、一つには、深く根づいている純粹の劣等感のために、である。平等の問題を単に云々するだけであることを彼らはひどく嫌う。けだし、それは彼ら自身の不適切、拒絶、失敗という幼年時代や学校

時代にまで遡る無意識的な感情を覚醒するからである。心理的に言うと、生きる経費(正直に言ってとても悔いがたい)または隣人の行為について不平を言ったり、てっとりばやい利潤を求めたり、さまざまな賭金、ビンゴの賭金、ダービーの賭金を獲得したりする可能性について夢見たりすることは、人格的劣等、不適切、懸念という耐え切れないほどの苦痛な事実を直視するよりもずっと容易である。

現在の文化が基盤をおいているのは、個々の労働者の福祉に対する顧慮や考慮から生ずる諸価値ではなく、富と生産性増大に対する崇拜に基づく諸価値である。事実上すべての点においてそうであるように、二種類の価値が衝突するところでは、犠牲とされるのは個人の真の福祉に対する考慮である。事実、社会において無視されている価値に注目するだけで自己に変人の烙印を押すことになる。たとえば、自動車産業の雇用者に、彼の工場の労働者が「健全な」人々で、すべての通常の人々が潜在的に付与されている精神的肉体的な多方面の才能を十分に活用しているかどうか、に関心があるか尋ねることを心に描いてごらんさい。

しかし、非熟練あるいは半熟練である仕事の大多数というまでもなく、細分化された仕事かなりの訓練と技能を必要とするときさえ、機能の極度の細分化以上に、ある人の労働人生の全体にわたって成長を妨げたり、単調と退屈を生み出したりするものが何かあろうか。余暇にもっと物質的な物の所有者となるために、同一の果てしのない反復的な課題に捧げられる単調な労働人生を、選択する権利が与えられたなら、誰が正気で任意に選択するであろうか。労働における成就と創造性の意識は人生のどんな正気の「哲学」においても明らかに不可欠である。

現在の制度の下では、意気喪失や退屈は下層の人々にけっして限定されるのでもない。もし上層部に悪魔的精力の形跡がときとしてあるなら、慢性的な退屈や誇示的消費(*)の形跡もまた誰の目にも明らかである。——飲酒、喫煙、恋愛遊戯、大陸間飛行や巡航、カントリークラブ、肥満や心臓病の悩み、引退生活の脅威、地位を顧慮することが動機となる無数の形態の虚しい消費、出世の追求がそうである。

* 原文はconspicuous consumption.財力や地位を誇示するための消費。Thorstein Veblenの造語。

現在社会の亀裂の鍵は教育制度である、ということも言うておく必要がある。もし工業力という大きな要塞が純粋に封建的な手段によって処遇されるほぼ相続的な領土であるとすれば、多数の低階層や非特権者は、彼らがいなければその制度は即座に解体するであろうけれども、実力主義社会である。すなわち、彼らの募集は能力別クラス編成、イレブン・プラス(*)、Oレベル、Aレベル、エイティーン・プラス、等級別学位、グランドナショナル(**)によってであり、最後者において競争馬の大部分は、以前の世代のきわめていちぢるしい不利を負っているものから生まれ、育ったので、最初の障害柵で転倒する。

* イギリスの国家試験制度の一つ。以下同じ。

** 毎年3月リヴァプールで開催される大障害競馬。

それは教育制度というよりはむしろ、全国生産性表の要求によって決定される、それぞれの段階で就職するにふさわしいものを選択するように企図された一連の試験である。大教室と教師の能力の格差という現在の不利な状況下においてさえ、入学できるおよそ二倍の志願者——競争して入学できる見込みが乏しいと知って志願を思い止まる人々の未知の員数を考慮の外におくとしても——が大学教育を受ける資格があり、それを求めている。

このイレブン・プラス競争の結果として、多くの子供の学校時代の後半の目標は幼い時代すらよりも強い不安感と憂慮感によって毒され歪曲される。そのような風土において、真に必要な教育は大学入学競争の冷酷な要求にたいがい犠牲にされている。かくして、多くのものは、みんなが就くことができる特権的な仕事がないということで、受ける能力があり大いに望んでいる高等教育を全く受けることができない。

富獲得という国民的宗教によって指令される労働の極端な細分化の枠組みのなかで、教育の大渦巻きの苦悩と均衡のとれてない集中からの脱出路は全くない。しかし、人々がそうした屈折した諸価値から自己を解放するやいなや、脱出が可能になり明確ともなる。そのような持てる人がそれらに耽溺すべきであるという原則に基づいて最も機敏で精力的な、温室育ちを強いられた人々に最高の教育的な技能をふりあてるのでなく、両親が担わざるをえなかった過度の社会的重荷によってきわめてひどく損傷されている人々の教育上の不利を克服することにずっと多くの注意が集中されるであろう。このようにして、基本的な権利でなければならないもの——私たちに伝わり、もっと幸運な兄弟姉妹が自由に利用できる最高の文化との接触——を要求するように勇気づけられる人々が次第に増大するであろう。

そのとき自動的にこの文化は特権の文化ではなくなるであろう。それは平等の文化となり、単純な論理の問題として、学識や知的な応用性に関するのみならず、肉体的な器用さと技巧に関する教育をも包括するであろう。要するに、私たちは、純粋の高等教育は生産的である技術をも学ぶことから成り立っているということ、知的労働のみまたは肉体労働のみをするものは完璧な人間ではないということ、完璧な、創造的な、均衡のとれた生活をおくるために、私たちすべては性格の両面を発展させる必要があるということ、を発見するであろう。

彼らがこの事実を評価しようとしなかつると、自分自身の欲求を配慮する全責任を免れている個人は、万人によって同じように必要とされる物質的な富を生産する仕事において細分化するように精神的文化を剥奪される運命にある兄弟姉妹と全く同様に、人間であることや人生を理解することにおいて、苦悩する。

ある人を知的労働者または肉体労働者として類別することは、人々を支配者と被支配者、雇用者と被雇用者へと分断することが社会にとって破滅的であると同じぐらい、個人にとって悪い。まさしく後者こそ不完全な個人を創造することに起因する制度的な形態である。

それは、非自然的で、人間的見地からして浪費的で、人を挫折させ、不正である体制であって、とても不毛で競争的であるので、究極的に戦争に連なる。

こうしたことすべてに対して、懐疑論者は「なるほど、だが後もどりすることはできない」と答えるのみで、きっぱりした口調でそう言う。進歩と生産性は通常人の宗教の礎石であるように思われる。論議はこんなふうに進展する。「あなたは、物質的に私の暮らし向きがもっと悪くなるであろうと認める生活様式に自由意志で同意するように私に求めている。あなたは私が自発的に、音よりも速く私を動かすことができる機械なしですませ、四足獣に逆行するように私に求めている。あなたはコンピュータなしですませて自分で計算するように、大規模経済の利便なしですませて家内工業へ逆行するように私に求めている。なんと馬鹿げたことか。いずれにせよ、不可能だ」。

ジョージ・オーウェルは、物質的進歩、富、権力崇拜に暗に内在する脱人間化といったものを大いに醒めた目で見つめ、人間性がすでにしうわべだけになることを展望して心底狼狽していたが、生産性崇拜の虜囚から脱皮できなかった。彼は、「ウィガン波止場への道」においてこう述べた。「原始的な旅行手段を楽しむために必要なのは、他の手段を利用してはならないということである。人間というものには必要以上に厄介な方法で何かをけってしたがる。かくして雷文細工で魂を救済する例のユートピア人像は馬鹿馬鹿しくなる。何事も機械でなすことができる世界では、何事も機械によってなされるであろう」。

私は、このことが大部分の人々がその問題について感じることでありと理解しているのだが、その議論の正当性を認めることができない。すべてはある人が実際に何を望んでいるか、それらの本当の価値が何であるか、に確実に左右される。私が純粋に馬車旅行を享受し、自動車や飛行機旅行よりも好むなら、たとえ大量生産物よりも劣っているにしても、自分で使用するためにものを作るのを本当に楽しむなら、好みを表現しそれを実践するについて何が非合理的、いかさま、素人ごのみ、非現実的なのか。

事実、大部分の人々は、もっと多くのものそれ自体、スピードそれ自体、などなどを好むように深く条件づけられている。これらはその本当の価値を具現しているように思われ、彼らが単なる理性的な議論によってそれを断念できそうにないことは明らかである。ある人の基本的必要物は非常に単純であり、富はそうした基本的な必要物のなかになく、人々にとって不必要であるのみならず有害でもある、という事実はいぜんとしてそのまま残る。同胞との調和のとれた関係以外に、基本的に必要なのは生き残るために必要な素朴な、骨の折れる労働を自分自身のためにする必要性である。これ自体が私たちに別の基本的な必要物、多様な労働を提供してくれる。

エリック・ギルは、製図工や工芸工としての自分の経験をもとに語り、それを「自叙伝」のなかで、こう表現した。「私はむしろ自身が職人でありたいし、その目的から反抗を始めたい。私は職人でありたいし、職人の権利、つまり作るものを企画する権利、および、

職人の義務、つまり企画したものを作る義務を要求したい」。

もちろん、人々はこうした本質的な事実を自由に、だが曖昧にはなく、拒絶できる。他の生活様式——本質的に他の生活様式はたった一つしかない——は、規模と破壊の程度が絶えず増大する戦争に論理的に連なる。このことを平和な惑星征服競争に転ずることができるという確信は神話を使ってごまかそうとする政治家特有の試みである。宇宙競争そのものは、途方もない費用とは全く関係なく、軍事力と戦略的優位をめぐる競争の本質の一部であり、その意味するところは、平和主義者はいうまでもなく、正気の人々には説明する必要はあるまい。

要約すると、平和主義者とは、理由が何であれ、いかに表向きは正当であろうとも、同胞たる人間の生命を剥奪しようとするこの意味する道徳的精神的重大性を認識できる人々のことである。そのような方策を、これが道徳的に優れている人々の生命を劣っている人々の犠牲にすることを包括するという実際の理由で、拒絶する人々に対して、これは変えることのできない宇宙の法則である、と反論できる。もしXがけって殺害に訴えず、他方、Yはそのような抑制に思い煩わなければ、Xの身体、Xの生命は、必ずや、いつもYの思いのままになるにちがいない。

こういうわけで、平和主義は、宇宙と人間の関係の性格を本当に宗教的に理解できるかどうかにかかっている。生命の畏敬は、いずれにせよ何人の統御能力内にもない、それに引き続く一連のできごとに影響を与えるために、殺害することを意味するのではない。生命の畏敬は生命を尊重することを意味し、すなわち、生命を抹殺することを意味するのではない。人生の目的は、良い人々が悪い人々の手にかかって抹殺されるのを救済することではない。一つの理由として、ある人がどれだけ良く、どれだけ悪いかをけって完全には誰も確信できない。人生の目的は悪を犠牲にして善を例証すること、そうすることによって世界の善の力を強化することである。

議論の次の段階は暴力そのものは権力への意思の結果であるということ掌握することである。毛主席が、「政治権力は銃身から流出する」と述べたときはもちろん正しかったが、その命題のずっと重要な転換命題、つまり、銃身は権力への意思から流出すると付言するのを失念した。私たちを圧倒しようとする大部分の悪弊の源泉であるのはこの権力への意思そのものである。

だから、暴力という悪弊を理解すると論理的に権力追求を断念することになる。権力を放棄することは、権力を獲得し、支配者を打倒しようとし、革命を引き起こし、新しい制度の青写真を企画する考えをすべて放棄することを意味する。それらの代わりに、アナキストは自己のなかの邪悪の潜在力を根絶し、そうすることによって他の人々との関係の性質を変革しようとする。十分な人々がこうすることに成功するとき、社会制度は、そのときの人間の信念と関係を反映するのであるから、必然的に変革しはじめるであろう。

人間は物質界における精神的動物であり、究極的には精神生命によって統治されている。

外的な力の変更に自然の暴力と人間の低劣な側面を反映する。真正の人間的に有益な変革は精神的な変革を通してのみもたらすことができる。この目標に向けて国家の外的な強制的拘束を責任ある個人の良心の内的な拘束で代替することが必要である。ジェームス・アントニー・フロウドはこう述べた。「『外的拘束からの一切の解放は』、と迷信にうつつをぬかさなかつたある人は言う、「それが自制の力の増大をとまなわれないならば、致命的であるというほかはない」」。

最後に、アナキストは同胞愛を求め、階級戦争を(他のどんな戦争も)求めないが、階級支配にも屈伏しまい。彼らは議会制民主主義という詐欺的な異様なしきたり(*) にもはや黙従しないが、それは、議会制民主主義が暴力に基づく階級支配の現実を隠蔽するからである。議会(雇用者のであれ、財政家のであれ、労働者のであれ、富の大きな兵器庫を代表する)と社会主義者の間には、どんな折衷物もありえないし、まして議会(想像を絶するほどの暴力の兵器庫に基づく)と平和主義者の間に、どんな折衷物もありえない。その意味で、平和主義者が総体的な革命、妥協できない革命ではあるものの、個々の人間の魂のなかでのみ生成することができる革命を希求する、ということは事実である。

* 原文はshibboleth. 旧約聖書「士師記」12:5-6参照

平和主義者は、人々の心のなかにある暴力に抗する障壁がとて心許ないので暴力や殺害へ頼ろうとすることを絶対的に拒否する以外のどんなものも適切な防壁として役立たないであろう、と正しく認識している。アナキストは、暴力は多数の個人や集団の間での権力と支配をめぐる複雑な闘争のこのうえない効力によってかもしだされている、と正しく認識している。

平和主義の弱点は、戦争が現実にも勃発し、そのときに戦争がヒステリーではないにしても、異常に強力な外国ぎらいで排外主義的な情緒と格闘せねばならなくなるまで、それが仮説にすぎない、ということである。アナキズムの弱点は、一方における権力への敵意と他方における深く政治を志向するそれ自身の伝統との間の矛盾にある。

両者の長所は、今のこの現実におけるそれらの具体的な排他主義と、権力を持つものの策略を隠蔽する仰々しい修辞への苛立ちとを鋭く刻む刃にある。非武装について語る人々に向かって平和主義者はこう述べる。「私たちが探究する誠実の証明はきわめて単純である。つまり、銃を捨てよ、である。銃を携帯しつづけることはそれだけで不誠実の証明である」。平等や正義について語る人々に対して、アナキストはこう述べる。「私たちは、あなたが他人を支配するために他人に対する権力を獲得しようと努めるのを止めることにより正義と平等を愛していることを実証するとすぐに、あなたの言行を信じるであろう。ただし、富を支配し、それを処理する権力が不平等や不正義のそもその根源なのであるから」。

戦争を廃絶するためには、それに関与するのを拒絶することは確かに必要であるが、戦

(4 頁へ続く)